

学術通信

IWASAKI ACADEMIC PUBLISHER NEWS

No. 117

2019 = 春

■目 次 ■

●論文・エッセイ● 邪道を生きる 東アジアで語り合うこと ADHD は理解と支援、価値観の変換で才能にもなる 児童養護施設心理職の“これまで”と“これから”	神田橋條治 富樫 公一 高山 恵子 井出 智博	2 4 7 10
●書評エッセンス● 力動的心理査定 ベックの統合失調症の認知療法	6 12	
●駿河台だより● 重版出来情報ほか ●巻末付録● 新刊案内	13	

邪道を生きる

神田橋 條治

先日、北中淳子先生から論文別刷りが送られてきました。先生は慶應大学教授で、専門は文化人類学です。表題は『東洋的』精神療法の医療人類学で「多文化間精神医学会」の学会誌の特集論文です。副題を見て「ビックリ」。「神田橋臨床のエスノグラフィー試論」とあります「オヤオヤ」です。「エスノグラフィー」とは初耳ですが、対象とする他民族の文化の中に身を置くことを介してその文化を把握・考察する、文化人類学の研究手法らしいです。そう言えば先生がボクの診療室に臨席されたことがあります。あれが研究活動だとはまったく気づきませんでした。

先生は、合理的知性を根幹とする西洋文化の流入に、日本の知性が出会い・圧

倒され、消化・対峙すべく奮闘した歴史を概観し、ことに精神分析の到来に対する我が国の「精神療法」文化の取り組みが種々の葛藤と精錬とを経て、輝かしい知性の華を咲かせていることを短い論述のなかで指摘しておられます。

そうした前置きのもとに、ボクの臨床が「身体を通じた主觀と客觀の統合」「脳と心の養生論」として考察されます。内容は気恥ずかしいので、興味のある方は「心と文化」誌の最新号（2018.9）をご覧いただくとして。「心身不二」を根底にするとの指摘を含め、当人であるボクにとってとても納得できる論考です。「相手の利になるように」だけを目標に、日々ののた打ち回っているボクにとって、理論的根拠をいただいたような安堵感が湧きました。そして瞬間「こいつはヤバイぞ」と連想しました。「合理化」というコトバも浮かびました。「技」が「理」に支えられると、「理」に操られる「麻薬耽溺」となります。現場での「技」は「成果」に支えられています。そして、「成果」が量られるのは、今日「神」の

かんだばし・じょうじ＝精神医学
鹿児島市伊敷病院。著書に、『発想の航跡——神田橋條治著作集』『追補 精神科診断面接のコツ』『改訂 精神科養生のコツ』（岩崎学術出版社）、『神田橋條治 精神科講義』『治療のための精神分析ノート』（創元社）など。このほど『発達障害をめぐって——発想の航跡 別巻』を小社より刊行。

地位に君臨する「数値」によってではなく、「体調・気分」です。ひところボクは「足が地に引っ付いているから飛べないんだ」と自嘲していましたが、近頃は「羽根のない虫も幸せに這いずって生きている。分相応の人生だったのだ」と納得しています。もしかしたら、北中論文の眼目はその辺りにもあるのかもしれませんと連想しました。

もうずいぶん昔の思い出です。群馬県の方々のお世話で、「神田橋・土居ジョイントスーパーヴィジョン」がありました。公開スーパーヴィジョンの形式で、まずボクが個人スーパーヴィジョンをしてそれに土居先生がコメントされる。次に土居先生が個人スーパーヴィジョンをされてそれにボクがコメントをし、ついでフロアを含めての質疑応答をする会でした。この形式はとても稔りあるものですから、いまもどこかで行われると良いのになあと思います。

夜の伊香保温泉での食事の後、土居先生ご夫妻と雑談の際、ボクいつものちょっかいをだして「土居先生が『出たとこ勝負』とおっしゃっているのを、ボクは『行き当たりバッタリ』と言っています」と申し上げました。すると先生の奥様が

「あなたは喧嘩早いから、『出たとこ勝負』が似合っているけど、神田橋サンのは少し無責任みたい」とおっしゃいました。グッと詰まったボクは咄嗟に「バッタリの後に寝技があるんです」と答えました。奥様は「アア、じゃあ良いわね」と言われました。ボクはこのやり取りがとても気に入っています。答え行動自体が「バッタリ→寝技」を具現しているからです。形と中身の一致です。ときおり、形と中身が矛盾している人を見聞して楽しくなります。心のなかで「寝技」の絡みつきを仕掛ける悪癖があります。

時を経るにしたがって、ボクの臨床は寝技中心になり、立ち技もどちらが相手をリードし・されているのか不明の、「行き当たりバッタリ」の極致へ進むようになりました。まさに「邪道を生きる」世界です。その結果、北中先生は論文が書け、ボクは how to ものか雑文しか書けなくなっています。ふと北中先生は「男性性」を発揮され、ボクは「女性性」を発揮しているのかもしれない、との連想が浮かびました。「こいつはイヤ」身体が緩みニコニコしています。北中先生ありがとうございます。またおいで下さい。

東アジアで語り合うこと

富樺 公一

2018年12月に、一つの夢がかなった。私は、台湾自己心理学グループのメンバーとともに、台北で「東アジアにおけるトラウマの歴史と、被害－加害関係について」と題したシンポジウムを行った。台湾グループの代表許豪沖医師と私は、登壇者として台湾から張凱理医師、米国からDonna Orange 氏、中国から劉翼靈氏をお呼びした。日本からは私が登壇した。中国の方の参加については、事前に何人かと交渉を行ったが、内容の繊細さのためかお断りを受けた。結局直接参加いただける方は見つけられなかったが、ドイツで精神分析の訓練を受けてい

る劉翼靈氏が Skype を通して参加してくれた。私たちはそこで、患者の語りの中にある日中戦争や第二次世界大戦、その後のテロや内戦、政治的不公正に関係した歴史的トラウマの欠片について語るだけでなく、私たち自身や家族の中にある世代を超えたトラウマの欠片について語り合った。私が長年、どうしてもやりたかったことだった。

シンポジウムでは、Orange 氏は原爆の使用と米国における奴隸制度の歴史について語った。私は、祖父が戦時中に満州の關東軍にいたことと、長崎と広島で被爆した両親を持つ患者の体験を語った。張凱理医師は、中国共産党と国民党との内戦が「中華人」全体に及ぼした影響と、台湾の2.28事件について語った。劉翼靈氏は、精神分析と政治、民主主義についてコメントをした。フロアの参加者も、誰に勧められるわけでもなく自らの体験を語った。フロアには7人の日本人の同僚もいた。

「祖父は戦時中日本軍に殺された」「数世代前の親戚に重大事件の加害者がい

とがし・こういち = 精神分析

甲南大学文学部教授、TRISP 自己心理学研究所精神分析家、栄橋心理相談室精神分析家。著訳書に、『乳児研究と成人の精神分析—共構築され続ける相互交流の理論』(誠信書房、監訳)、『ハインツ・コフート——その生涯と自己心理学』(金剛出版、共訳)『不確かさの精神分析——リアリティ、トラウマ、他者をめぐって』(誠信書房)など。このほど『精神分析が生まれるところ——間主観性理論が導く出会いの原点』を小社より刊行。

る」「母親は長崎で被爆している」「母は祖母が2.28事件で殺された瞬間を見た」など、歴史的トラウマは、語られる場合でも、語られない場合でも、何らかの形で家族の中に代々影を落としている。それは個人にも影響を与えるが、社会を複雑系システムとして見れば、今私たちが生きる国際関係の緊張にも何らかの影響を与えていることがわかる。私たちは、その政治的・社会的文脈の中で苦悩する。しかし私は、それに対する解決策を見つけるために議論したかったわけではなかった。ただ臨床家として、個人として、その体験を語り合いたかった。

私と台湾のメンバーとのかかわりは10年になる。私は2009年にグループの顧問になってから、毎年台北を訪れ、台湾自己心理学グループの年次総会で発表を行っている。年一回の10年間のやりとりで語られてきたことの多くは、もちろん、精神分析療法や精神分析的心理療法の実践や理論にまつわることである。しかし、彼らとの公的・私的なやり取りの中で、私が強く印象付けられたのは東アジアの国際情勢の中で彼らが体験している緊迫感だった。それは彼らの言葉の端々に現れた。大陸と日本に挟まれた台湾の地理的状況は、日本では感じられない緊張を作り出していた。彼らは、北京語を共有する者として、中国で發展しつつある精神分析の訓練に協力しているが、さまざまなことが生じるそのやり取りの中には、彼らに脅威を感じさせるものもある。日本と中国という経済大国に挟まれて彼らが体験している経済格差も、日

常生活に漫然とした不安感を作りだしている。それは戦後形成された政治的状況であるとともに、戦前から続く東アジアの緊迫感もある。日本にいる限り笑い話で終わってしまう大陸の動きも、台湾では深刻な話になる。

そうした体験を積み重ねるうちに、私は次第に夢を抱くようになった。東アジアの臨床家どうして、政治や社会、歴史、経済の中のトラウマについてただ語り合いたい。それをできる場所は、日本でも中国でも、アメリカでもなく、台湾なのではないか。患者とのやりとりを語るのでも構わないし、臨床家自身のことを語るのでも構わない。政治家ではない私は、その社会構造に何らかの変革を与えられるとは思っていない。どうしようもない経済格差、政治、国際情勢の中で個人が翻弄されること、かつての戦争への複雑な感情、現在と過去、未来の文脈の中で個人が感じる苦しさに対して、臨床家としてできることはおそらく政治運動ではない。しかし私は、人がそこでもがいでいることも知った。間主観的に見るならば、個人の苦悩は文脈の中にある。その文脈とは治療関係だけではない。家族やコミュニティ、社会、政治、経済、国際情勢、そしてその歴史全体である。「私の空虚感や人への不信感は、隣の国との間で70年前起きた戦争と、その中で他者の生死に触れた祖父母の体験と関係がないと誰が言えるだろうか。

東アジアには現在どうしようもない緊張感がある。その中で私たちは、他者や他国へ複雑な感情を抱き、それと照らし

て自分をさまざまに描き出し、自分に複雑な感情を持つ。そこで「私」は正義の人になるかもしれないし、罪悪の人になるかもしれない。その想いは一つの集合体の中で、個人や国家間の緊張を生み出すだろう。その中で私たちは何ができるのか？この問い合わせへの私の答えはこうだった——臨床家は社会を変えないかもしれない。しかし臨床家は、人と人に軋轢や緊張が走ったときに何をしたらいいかを知っている。家族の問題、夫婦の問題、コミュニティに問題が生じたとき、臨床家は「さあ、話しましょう」「集まって

話しましょう」とやる。話し合っても解決できないかもしれない。話し合っても、結局相手のことは理解できないかもしれない。話し合うだけで苦しいかもしれない。「でも、話しましょう。そしたら何かが動くかもしれない」とやる。私はそれを、やりたかった。社会という非線形システムの中で、この試みは大きな動きになるかもしれないし、あるいは、霞のようにその影響は消え去るかもしれない。それでも、ただ集まって話す。するとそれは何かになるかもしれない——。

◇書評エッセンス◇

力動的心理査定——ロールシャッハ法の縦起分析を中心

馬場禮子 編著

本書を通して、評者が再確認し心惹かれたことがある。それは、馬場法とはロールシャッハ反応を共感的かつ診断的に体験する（必ずしも「読む」だけではない）ために作られた精緻な枠組みの一つである、ということだつ

た。「共感と診断の両立は当然」と言う人があるかもしれません。しかし私の思うに、これはとても難しい。この態度が真に果たされるなら、かなりの臨床作業が進むのではないかとさえ感じる。

(中略)

そしてもう一点惹かれたのが、本書に通底する師弟間の対話だった。あちこちに垣間見える執筆者と馬場との対話（もしかすると格闘）が、実に面白いのである。それは

師匠への問い合わせであり、師匠に追いつき追い越したいという気持ちの集積でもあるだろう。

そもそも、あらゆる理論と実践はそうして発展してきたはずである。本書が馬場一人の書き下ろしではなく、弟子たちとの共同でまとめられている意味は大きい。今後への発展可能性が含まれているからである。

(評者・吉村聰=上智大学
■心理臨床学研究 36巻3号(2018)より抜粋)

ADHDは理解と支援、価値観の変換で才能にもなる

高山 恵子

1997年、当時 ADHD（注意欠陥多動性障害）研究の第一人者であったラッセル・パークレー博士の講演を聞き、強い衝撃を受けたことを、今でも鮮明に覚えています。テーマとなっていた「実行機能」はそのとき初めて聞いた言葉でしたが、自分が学生時代、多くの挫折と失敗を繰り返した理由が明確に分かりました。「私が悪いわけじゃなかった、私の実行機能が悪かったんだ！」とセルフエスティームがアップしました。その一方で、「ということは、私は ADHD がある障害者なわけ？」という複雑な思いもありました。

ADHD のある方は、約 5% もいるといわれています。そんなにいるのだとしたら、このことを日本にいる実力を出し

きれない人たちや、その家族や支援者に伝えなければいけない！ 落ち込む間もなく、「CHADD (Children and Adults with Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder)」のような団体を日本でも作りたい！」と、壮大なアイデアが、そのとき浮かびました（博士の講演会を主催したのが、CHADD という ADHD のある方とその家族のための、全米で一番大きな非営利団体でした）。

当時、CHADD に参加した東洋人は私一人でした。有名な現地の先生方に、日本ではどうなっているのかと聞かれ、名刺交換できたことは貴重な経験でした。学術集会の期間中、会場のヒルトンホテルのレストランでパークレー博士を見かけ、思わず自己紹介をし、博士の話を聞いて深い感動を覚えたこと、日本では全く知られていない ADHD の啓発活動をするために、CHADD のような支援団体を作りたいという思いなどをお話しさせていただきました。心臓の鼓動が大きくて、びっくりするほど緊張していましたが、衝動性があつてよかったです。

たかやま・けいこ＝発達障害支援
NPO 法人えじそんくらぶ代表。ハーティック研究所所長。臨床心理士。薬剤師。昭和大学薬学部兼任講師。著書に『イライラしない、怒らない ADHD の人のためのアンガーマネジメント』(講談社)など。このほど『ライブ講義高山恵子 I 特性とともに幸せに生きる』を小社より刊行。

た瞬間でもありました。博士から「すばらしいアイデアです。ぜひ頑張ってください」と言っていただき、握手をして、ご著書にサインをいただきました。あれからなんと 20 年以上も経ちました。

帰国後、アメリカでせっかく学んだ ADHD の情報をお伝えしたくても、話す場がほとんどありませんでした。そこで、NPO 法人えじそんくらぶを設立し、すぐに ADHD 指導者養成講座を提供することにしました。指導者養成といつても、参加された方の 3 分の 2 が親でした。「我が子をなんとかしたい！」と思う感度の高い親御さんたちが、当時まだあまり普及していなかったインターネットで情報をゲットして、東京での開催にもかかわらず、北海道や関西からの参加もありました。地道に活動をしているうちに、文部科学省や厚生労働省からお声がかかり、特別支援教育や発達障害の政策に関する意見を述べるよう、会議に呼ばれるようになりました。

CHADD では、自分は発達障害の当事者だとカミングアウトして講演をしている有名な研究者がとても多かったので、私もそのようなスタイルをとりたいと思い、日本でめでたく ADHD と診断された後、講演会ではカミングアウトしてきました。そのときの一番の楽しみは、「実は、私自身が ADHD の当事者です」と言うと、たとえば 200 人ぐらいの参加者がメモをとる手を止め、一齊に私の顔を見るという瞬間でした。カミングアウトした後は、多くの方がより真剣に私の話を聞いてくださいましたので、かな

りのインパクトがあったことでしょう。最近はリピーターや私の著作をすでに読んでいる方が多いので、その快感を味わうことができないのはちょっと寂しい思いもありますが、啓発活動が進んだのだなという嬉しい瞬間もあります。

約 20 年間、発達障害の分野でお仕事をさせていただきましたが、発達障害があっても世の中で活躍している方、穏やかに幸せに生活している方がいます。一方で、能力が非常に高いのに他責や自責、不安が強かつたりして、能力が十分に發揮できないどころか、二次的な障害で鬱になっている方も非常に多いです。この差はどこにあるのでしょうか？ 支援をするうちに、色々なことが見えてきました。自分自身が当事者であるということもありますが、何を目標にすべきなのか、何を捨てるべきなのかということが、少しづつ見えてきたように思います。

我が人生を振り返って思う何よりも大切なことは、「普通」を目指さないこと。これに尽きます。そして、自分の能力に見合った目標を立て、自分の限界を見極め、苦手なことは自分 1 人でやろうとしない。不完全な自分を受け入れ、好きになることだと思います。

そのためにも、当事者はもちろん、当事者のご家族、支援者の方々にも、不完全な存在を受け入れて、リスペクトしてほしいのです。私たちはすべて、最初は 1 人では何もできない赤ちゃんです。そして、いずれは年とともにまた、だんだんといろいろなことができなくなってしまいます。そうです、もともと私たちはす

べて、不完全な存在なのです。

けれども、何かができなくても、幸せにはなれるのです。そのことを丁寧にお伝えしてきました。それを今回、岩崎学術出版社さんから「ライフ講義集」という形で、本にまとめていただきました。当事者として、支援者として、これこそが重要というエッセンスを集約しました。

とくにお伝えしたかったことの1つは、「失敗」に関する考え方です。失敗しないように育てるのではなく、失敗することを想定内にして、自分を責めたり他の人を責めたりせずに、その後どうしたらよいかを考える力を育てることこそ、重要なと思います。

本には書けなかった、まだまだお伝えしたいことがたくさんあります。とくに、発達障害の悪い面だけにスポットライトを当てるのではなく、特性をギフトとして生かす方法をお伝えしたいと思っています。そのために変えなければいけないのは、当事者サイドだけではなく、日本

の古い価値観、とりわけ「同じでないとダメ」「すべてが完璧にできないとダメ」「努力すれば何でもできる」という考え方なのだと思います。

私は、ADHDの特性による多動のため、1つのことに集中できず、薬学部を卒業しましたが薬剤師にはなりませんでした。そのかわり、英語教育、薬学、幼児教育、特別支援教育、カウンセリングを学んできましたので、幅広い視点で発達障害の支援を考えることができたことは、よかったです。日本では、1つの専門を深めるということを大切にしますが、アメリカでは修士号や博士号をいくつも持っているクラスメイトに出会いました。彼らに影響を受け、結局私もアメリカの大学院で、教育学とガイダンスカウンセリング学の修士号を取ることができました。環境が変わると能力が開花するということを実感しましたので、そのエッセンスをこれから多くの方に伝えていきたいと思います。

児童養護施設心理職の “これまで”と“これから”

井出 智博

私が大学院生の頃（20年ほど前）、全国の児童養護施設に心理職（施設心理職）が配置されることになりました。当時の厚生省は心理職の配置を伝える通達の中で、児童虐待等による心的外傷のための心理治療を必要とする子どもたちに心理治療を実施することを目的として配置する、とその目的を示しました。全国的にスクールカウンセラーの配置が進められた時代でしたので、臨床心理士の有資格者を始めとするベテランにはスクールカウンセラーとして勤務する方が多くいらっしゃいました。一方で、待遇面で劣る施設心理職の多くは、若く、経験が浅い心理職がほとんどでした。私が勤めた施設の近隣の施設心理職の多くは私と

同じ、大学院生だった記憶があります。

学部生の頃から児童相談所一時保護所でボランティアをしていたこともあったために施設心理職として働く機会を頂くことになったのですが、当時は施設心理職がどのような役割を担うかについての文献は皆無でした。そのような中で駆け出しの施設心理職だった私たちが頼りにしたのは西澤哲先生が翻訳して紹介してくださいっていたエリアナ・ギルの『虐待を受けた子どものプレイセラピー』という本でした。生活の場を通して行われる修正的接近と心理治療を通して行われる回復的接近を軸としたアプローチを紹介したこの本を読み、施設心理職として虐待を経験した子どもたちに心理治療を行うことを思い描いて施設での勤務を始めました。

ところがそこで待っていたのは本の中に描かれていた内容とはあまりにもかけ離れた現実でした。そもそも、その当時の施設には“治療”という概念がほとんどありませんでした。むしろそうした表現に対してアレルギーのような反応があ

いで・ともひろ＝臨床心理学

静岡大学教育学部准教授。著書に『研究と臨床の関係性——臨床に基づいたエビデンスを求めて』（編著、創元社）、『社会的養護における生活臨床と心理臨床』（分担執筆、福村出版）など。このほど、『子どもの未来を育む自立支援——生い立ちに困難を抱える子どもを支えるキャリア・カウンセリング・プロジェクト』を小社より刊行。

ったといつてもよいかもしれません。今の施設よりもずっと管理的で、子どもたちが集団生活を送る施設の中で、日課に沿った生活を送らせようとするケアワーカーの大きな声が響き渡っているようなところでした。心理療法を行うために準備された部屋もとても子どもたちの心理的な安全が確保されるような構造ではなく、面接をしていてもその部屋に置いてある物品を取りに時々職員が出入りするような場所でした。そこには生活と心理の連携というような概念もなく、心理は心理で勝手にやってください、というような雰囲気さえありました。

こう書くと施設を批判しているように見えるかもしれません、決してそういうわけではありません。施設心理職だった私たちが施設の中で何ができるかが良くわかつていなかつたのと同じく、それまで施設で子どもを支援してきたケアワーカーも施設心理職をどのように活用してよいかがわからずに入りました。施設心理職としてどのような活動をすればよいのか迷った私は、いろいろな施設の心理職がどのような活動をしているのかを尋ねて回りました。期せずしてそうした活動は私にとって重要な研究のテーマとなり、全国の施設心理職の活動状況や活用状況についての実態調査を行うことになりました。そして、その中から長年に渡ってその施設で役立つと評価されるような活動をしている施設心理職のインタビュー調査を行ったりもしました。こうした調査から見えてきたのは、海外から輸入された理論は参考にしつつも、そ

れぞの施設での経験をもとにして、日本の児童養護施設という心理臨床の場で、それが必要とされる活動を構築しようと模索している施設心理職の姿でした。近年、Evidence Based Practiceという言葉をよく耳にします。科学的な根拠に基づいた実践という意味ですが、そこで行われていたのは Practice Based Evidence、つまりそこで必要とされる実践を重ねることによって科学的な根拠を生み出すことでした。施設心理職の草創期に行われていたのは、長年に渡って行われてきた児童養護施設におけるケアワーカーの実践と、新たに参入した施設心理職による実践の相補的な関係を探る試みだったと思います。当時の私はこうしたことを見聞きしながら、「施設心理職のアプローチは“治療”というより、“成長（発達）促進”的なアプローチだ」というメモを残していましたが、今になって読み返してもそうだなと思います。

施設に心理職が配置されて、20年が経過します。草創期には心理職の導入に積極的ではなかった施設への心理職の配置も進み、常勤化される予算もつくようになりました。また、乳児院や知的障害児施設といった児童養護施設との関係が深い施設への心理職の配置も進められてきました。心理臨床学会を始め、学会の年次大会や論文集で施設心理職の活動や施設における心理的なケアをテーマとした研究や実践の報告も見られるようになっています。心理職の活動内容に目を向けると、狭義の心理療法だけではなく、心理教育や集団療法、生い立ちの整

理、性（生）教育、自立支援、ケアワーカーへのコンサルテーション、さらには施設におけるマネジメント業務や家族支援、地域の関係機関との連携など、とても幅広くなってきました。一方で、施設における養育単位の小規模化が進められ、平成29年度に示された新しい社会的養育ビジョンでは、里親家庭の活用を強く推進する方向性が示され、施設が担う役割には大きな変化が求められるようにな

ってきました。施設心理職にもそうした動きの中で、施設心理職としての新たな役割を構築することが求められるようになってきます。公認心理師という新たな心理専門職が資格化される中で施設心理職の草創期から発展期へ、今後、どのような展開を見せるのかをとても楽しみにしています。

◇書評エッセンス◇

ベックの統合失調症の認知療法

アーロン・T・ベック、ニール・A・レクター、ニール・ストーラー、ポール・グラント著 大野裕監訳 岩坂彰訳

本書においてアーロン・T・ベックを始めとする著者たちは、近年とみに広がりを増している統合失調症の認知療法を展望

し、正統的な立場からその認知療法の現在の姿を明らかにしようとしている。統合失調症の認知療法の全体像を捉えるのに、認知療法の創始者であるベックほど適した人物はない。また、広い視野を保ちながら理解を深め、それをスムーズに治療に結び付けるのは、従来から一貫している彼のスタイルである。

(中略)

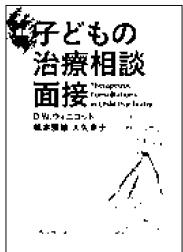
本書は、翻訳で433ページ、文献も679を数える労作であり、統合失調症の認知療法の一つの到達点として見ることができます。意義深い訳業を成し遂げた訳者たちの労を多したい。
(評者・林直樹=帝京大学医学部附属病院メンタルヘルス科■精神療法44巻6号(2018)より抜粋)

●駿河台だより

●重版出来情報

品切れ、品薄でご迷惑をおかけしておりました以下の書籍ですが、重版出来いたしました。是非お求めください。

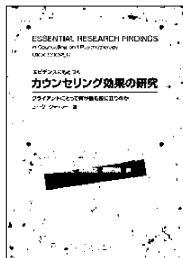
◎ D.W. ウィニコット著／橋本雅雄・大矢泰士監訳『新版 子どもの治療相談面接』(2刷) 本体価 4,800 円+税



ウィニコットが子どもを対象に行った治療相談面接 21 例の記録。卓越した治療技法と臨床感覚が臨場感豊かに再現される。待望の 2 刷出来！

◎ M. クーパー著／清水幹夫・末武康弘監訳『エビデンスにもとづくカウンセリング効果の研究——クライアント

にとって何が最も役に立つか』(3刷) 本体価 3,600 円+税



クライアントにとって真に役立つ臨床実践を求め、特定の学派に偏ることなくエビデンスを踏まえて探求した本書。好評を受け 3 刷出来！

●小社サンヤツ広告にご注目ください

小社は毎月 1 回、朝日新聞全国版にサンヤツ広告（朝刊 1 面下にある出版物の広告欄。下三段を横に八等分したスペースであることからそう呼ばれます）を出稿しております。掲載日は不定期ですが、その月の新刊と、注目していただきたい既刊書をmajieda の内容となっております。どうぞ楽しみにお待ちくださいませ。

学術通信

第 39 卷第 1 号

第 117 号

2019 年 1 月 31 日発行

春号

価格 70 円

† 読者の皆様へ

本誌の読者登録の際に、ご記入いただいた個人情報は、本誌の送付に用いる他、ご注文いただいた小社書籍の配送、お支払い確認等の連絡、当社の新刊案内および関連のブックフェア等の催事のご案内をお送りするために利用し、その目的以外での利用はいたしません。また、ご記入いただいた個人情報について、その情報をご提供いただいたご本人から、開示・訂正・削除・利用停止の依頼をうけた場合は、迅速な処理を心がけ法令に則り速やかな対応をするようにいたします。

編集人 ●鈴木大輔

発行人 ●杉田啓三

発行 ●岩崎学術出版社

〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台 3-6-1

菱和ビルディング 2 階

TEL : 03 (5577) 6817

FAX : 03 (5577) 6837

振替 00170-4-58495

URL : <http://www.iwasaki-ap.co.jp>

Email : info@iwasaki-ap.co.jp

印刷 ●ユー・エイド

不許複製

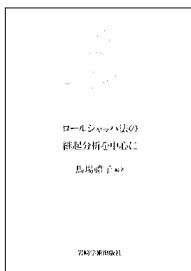
解釈と技法を「馬場法」として集大成し具体的に解説

2017.11

ISBN 978-4-7533-1128-6

力動的心理検定●ロールシャッハ法の継起分析を中心に

馬場禮子 編著



目次● 第I部 理論編 第1章 力動的解釈の歴史 第2章 施行法・記号化について—片口法とその修正点 第3章 各記号の解釈仮説 第4章 解釈法①—解釈過程の力動的理解と量的分析 第5章 解釈法②—継起分析 第6章 テストバッテリーと退行現象 第7章 パーソナリティの病理とそのロールシャッハ法への現れ／他 内容● 精神分析的理論とそれに基づくロールシャッハ法解釈の技法と理論を「馬場法」として集大成したのが本書である。その技量を高めるために具体的に何をすればよいか、具体的かつ詳細に書いた本書は、ロールシャッハ法に関心を持ち、さらに深めたいと考える人たちの一助になるであろう。

● A5判 360頁上製 本体価 4,500円+税

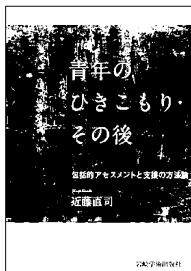
多職種支援と専門家の資質向上のために

2017.11

ISBN 978-4-7533-1129-3

青年のひきこもり・その後●包括的アセスメントと支援の方法論

近藤直司 著



目次● 第I部 ひきこもりの概念と理解 第1章 ひきこもりの概念整理 第2章 ひきこもりの成因論 第3章 神経症とひきこもり 第4章 パーソナリティ障害とひきこもり 第5章 ひきこもりと発達障害 第6章 ひきこもりケースの包括的アセスメント 第II部 ひきこもりケースの治療と支援／他 内容● 著者は医療や福祉、心理臨床などの領域で治療・援助実践にあたる専門職の資質向上のために、アセスメントをテーマにした研修に取り組んできた。本書では、多職種が共通して活用できる評価システムを提案し、専門職のスキルアップと、ひきこもりケースへの治療・援助実践の向上を図る。

● A5判 224頁並製 本体価 2,800円+税

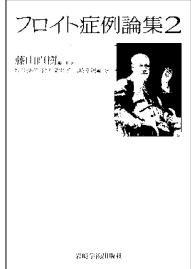
二大症例を臨床家のために読みやすい日本語で訳出

2017.11

ISBN 978-4-7533-1130-9

フロイト症例論集2●ラットマンとウルフマン

S・フロイト 著／藤山直樹 編・監訳



目次● 強迫神経症の一症例についての覚書（一九〇九） 序文 I 病歴の抜粋 II 理論編 ある児童神経症の病歴より（一九一八[一九一四]） I 前置き II 患者の環境と病歴の概観／他 内容● 本書は、精神分析を学ぼうとするなら必ず目を通さざるをえない重要な二症例、ラットマン（鼠男）、ウルフマン（狼男）と呼び慣らわれているふたつの症例についてのフロイトの論文を翻訳したものである。『フロイト技法論集』に続き、正確で読みやすく、かつ臨床家にすでに馴染みのある訳語で、スムーズにフロイトを読むことができる。続刊として「フロイト症例論集1 ドラとハンス」が予定されている。

● A5判 264頁上製 本体価 4,000円+税

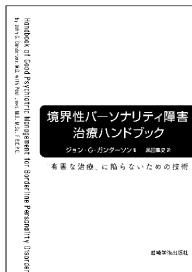
患者にとって「程よい」治療者であるために

2018.3

ISBN 978-4-7533-1131-6

境界性パーソナリティ障害治療ハンドブック●「有害な治療」に陥らないための技術

ジョン・G・ガンダーソン 著／黒田章史 訳



目次● 第I部 予備知識 第1章 程よい精神科マネジメント (GPM) 入門 第II部 GPMマニュアル——治療ガイドライン 第2章 一般的指針 第3章 診断をつける 第4章 治療を始める 第5章 自殺傾向と自殺目的ではない自傷に対応する 第6章 薬物療法と併存症 第7章 治療を分担する 第III部 GPMワークブック——症例解説 第8章 症例の説明 第IV部 GPMビデオガイド 付録／他 内容● 患者自らの内面理解を助け、よりよい生活を確立するために、認知療法的、行動療法的、そして精神力動的な介入を程よく活用し、患者にとって「程よい」治療者になるために必読の一冊。

● A5判 248頁上製 本体価3,800円+税

自らがんを患いながら最期まで患者に寄り添った医師の言葉

2018.3

ISBN 978-4-7533-1132-3

患者の心を誰がみるのか●がん患者に寄り添いつづけた精神科医・丸田俊彦の言葉

岡山慶子、中村清吾、森さち子 編著



目次● はじめに 第一章 悩める人といつも共にいること——丸田俊彦が語った20の言葉 1 答えがほしい 2 「わかった」と心の中で思ったときに努力が止まる 3 相手の素晴らしさを映し出す湖でありたい他 第二章 患者の心を誰がみるのか 第三章 チームで患者の心をみる 第四章 グループ・カウンセリングで患者の心をみる 座談会 カウンセリングによってどのように患者さんの心は変わったのか 第五章 サイコセラピストとして患者の心をみる あとがき／他 内容● あなたと共にいる——40年間がん患者の心と向き合い、自らも肺がんを患いながら、最期まで患者に寄り添った精神科医が語った20の言葉。

●四六判 192頁並製 本体価1,800円+税

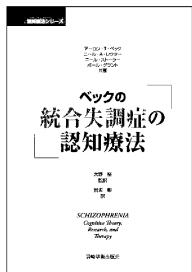
ベック認知行動療法の集大成

2018.5

ISBN 978-4-7533-1133-0

ベックの統合失調症の認知療法

アーロン・T・ベック、ニール・A・レクター他 著／大野裕 監訳／岩坂彰 訳



目次● 第1章 統合失調症とは 第2章 生物学的な要因 第3章 妄想の認知的概念化 第4章 幻聴の認知的概念化 第5章 隕性症状の認知的概念化 第6章 形式的思考障害の認知的概念化 第7章 アセスメント 第8章 関係づくりと治療関係の促進 第9章 妄想の認知的アセスメントと治療 第10章 幻聴の認知的アセスメントと治療／他 内容● うつ病への適応が知られる認知療法だが、統合失調症にも有効である。ただし複雑な障害ゆえ、治療の成功には疾患と治療に関する深い理解が必要となる。その理解のため本書は統合失調症の概観、症状の認知的概念化、認知的アセスメントと治療の提案、統合認知モデルを提示している。

● A5判 448頁上製 本体価8,000円+税

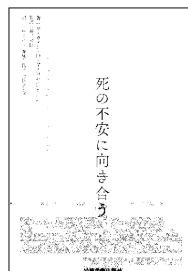
実存的精神療法家が説く、死の恐怖の克服法

2018.5

ISBN 978-4-7533-1134-7

死の不安に向き合う●実存の哲学と心理臨床プラクティス

アーヴィン・D・ヤーロム 著／羽下大信 監訳



目次● 第一章 人は死ぬ 第二章 死の不安を認める 第三章 覚醒するという体験 第四章 思考の力 第五章 死の恐怖を超える 第六章 死に目覚める——私の場合 第七章 死への不安に取り組む——セラピストへの助言 訳者あとがき 解題 内容● 著名な実存主義的心理療法家、アーヴィン・D・ヤーロム。本書は彼が、古今の哲学や、自身の体験、クライエントとの面談を通して学んできた「死への怖れ」についての論考である。セラピストの実務に役立つことはもちろん、小説家でもあるヤーロムの筆力によって、死の恐怖に関心をもつ一般の読者も読みやすい一冊となっている。

●四六判 304 頁上製 本体価 3,000 円+税

今日・明日から現場で役立つ助言が満載

2018.6

ISBN 978-4-7533-1135-4

発達障害支援のコツ

廣瀬宏之 著



目次● 第1章 初回面接の要点 1 はじめに 2 支援の階層性 他 第2章 診断から支援へ——それぞれの発達障害をどう支援するか 1 発達障害＝発達凸凹+不適応 2 状態像からの診断ということ他 第3章 支援の実際——大切にしたいことあれこれ 第4章 役立つ支援者になるには——自身のトレーニングについて あとがき 内容● 20年にわたり発達障害支援の現場で子どもとその家族に関わってきた著者が、その体験から学んだ「知恵・技術・心得」を惜しげもなく披露する。発達障害に限らず、あらゆる支援・援助の現場で日々苦闘する人に「今日・明日から役立つ」助言が満載の本。

●四六判 224 頁並製 本体価 2,000 円+税

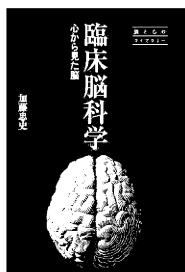
心理援助職が日々の実践で抱く疑問に答える

2018.6

ISBN 978-4-7533-1136-1

臨床脳科学●心から見た脳

加藤忠史 著



目次● はじめに 第I部 臨床心理と脳 第1章 無意識と脳 第2章 認知療法と脳 第3章 カウンセリングと脳 第4章 認知機能検査と脳 第5章 慢性疾患と脳 第II部 病気からわかる脳の働き 第6章 パーキンソン病とドーパミン 第7章 依存と側坐核／他 内容● 精神疾患は脳という臓器の病気でもあり、メンタルヘルスの臨床実践には脳についての理解が欠かせない。脳科学と臨床という両方の立場から精神疾患を取り組んできた著者が、分子や細胞からではなく、メンタルヘルス専門職が日々感じる臨床的疑問を手がかりに、知っておくべき脳科学の知識をわかりやすくまとめた。

●四六判 192 頁上製 本体価 2,500 円+税

みんなの支援の目標は「幸せに生きる」こと

2018.11

ISBN 978-4-7533-1144-6

ライブ講義高山恵子I 特性とともに幸せに生きる

高山恵子 著



●目次 ライブ1 発達障がいがあってもよりよい人生を ライブ2 支援の人たちへ～支援で変わる人生の質～ ライブ3 親御さんへ～親子で幸せになるために～ ライブ4 発達障がいのあるパートナーと暮らすあなたへ／他 ●内容 「診断名をつけることや、診断名の分類にこだわらず、その人の特性の理解と幸せになるために大切なことは何か。それは、他の人と比較せず、その人に合った目標を見つけ、一緒にうまくいく方法を考え、実践すること」。全国各地、発達障がい者支援の最前線で、高山恵子氏が支援者に伝え続ける声を、「みんなが幸せになるために」というライブ感そのままに書籍化！

●四六判 272 頁並製 本体価 1,800 円+税

生い立ちに困難を抱える子の将来展望を育む

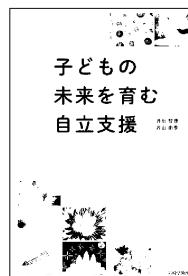
2018.11

ISBN 978-4-7533-1145-3

子どもの未来を育む自立支援

●生い立ちに困難を抱える子どもを支える
キャリア・カウンセリング・プロジェクト

井出智博、片山由季 編著



●目次 第1章 生い立ちに困難を抱える子どもと将来展望 第2章 生い立ちに困難を抱える子どもの自立と自立支援 第3章 キャリア・カウンセリングの視点から 第4章 キャリア・カウンセリング・プロジェクト(CCP)とは 第5章 キャリア・カウンセリング・プロジェクト(CCP)の実際／他 ●内容 生い立ちに困難を抱える子どもたちへの支援として、子ども自身の力や可能性、レジリエンスに基づいた支援として、キャリア・カウンセリング・プロジェクトを提案。子ども自身が「おとなになりたい」「将来について考えたい」という精神的なレディネスを形成し、将来に対する肯定的な展望を育むための取り組みを紹介。

●B5 判 176 頁並製 本体価 2,800 円+税

精神分析の理論や技法を日常臨床に活かす

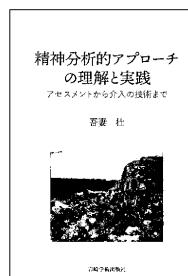
2018.11

ISBN 978-4-7533-1146-0

精神分析的アプローチの理解と実践

●アセスメントから介入の技術まで

吾妻壯 著



●目次 第1章 精神分析的アプローチの多様性——精神分析から支持的セラピーまで 第2章 精神分析的アプローチを理解する①——構造化 第3章 精神分析的アプローチを理解する②——無意識の探究と支持的要素 第4章 セラピーを始めてみる 第5章 精神分析的セラピーへの導入としての精神分析的アセスメント／他 ●内容 難解で厳しく日常臨床とは遠いものと考えられがちな精神分析だが、広い意味での精神分析的アプローチは、日々の臨床実践のために現実的な助けとなる。臨床場面での実践方法を論じ、サイコセラピーの実践に携わる精神科医や心理士など、精神分析の考え方に対する魅力を感じている臨床家に広く役立つ本。

●A5 判 240 頁並製 本体価 3,000 円+税

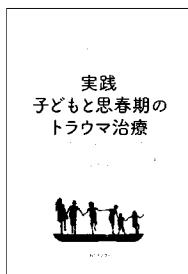
トラウマを経験した子どもたちへの介入の手引き

2018.11

ISBN978-4-7533-1147-7

実践 子どもと思春期のトラウマ治療●レジリエンスを育てるアタッチメント・調整・能力(ARC)の枠組み

M. E. ブラウシュタイン, K. M. キニバーグ 著／伊東ゆたか 監訳



●目次 第1章 トラウマの発達への有害な影響 第2章 子どもの発達、人の危険反応と適応——子どもの行動の理解のためのスリーパーツモデル 第3章 アタッチメント、自己調整、能力(ARC)の枠組み 第4章 養育者の感情管理 第5章 波長合わせ 第6章 養育者の一貫した応答／他 ●内容 著者らによって開発された「ARC(アタッチメント、調整、能力)」の枠組み。本書は、トラウマティックストレスを経験した子どもたちへの介入の手引きとしてこの枠組みを紹介したものである。発達能力を回復しレジリエンスを促進するための臨床ツールが満載。児童福祉にかかわる方は必携の一冊といえる。

●B5判 416頁並製 本体価 6,500円+税

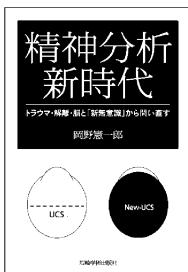
精神分析の従来の前提を問い直し未来を考える

2018.11

ISBN978-4-7533-1148-4

精神分析新時代●トラウマ・解離・脳と「新無意識」から問い直す

岡野憲一郎 著



●目次 第1章 精神分析の純粹主義を問い合わせる 第2章 解釈中心主義を問い合わせる(1)—QOL向上の手段としての解釈 第3章 解釈中心主義を問い合わせる(2)—共同注視の延長としての解釈 第4章 転移解釈の特権的地位を問い合わせる／他 ●内容 精神分析がパラダイムチェンジの時期を迎えた今、著者は本書において、「解釈とは」「終結とは」といった技法的な問い合わせにとどまらず、「解離」を愛着理論の視点からとらえなおし、さらには右脳の機能的な理解やディープラーニングの理解から新しいアイデアを提示することで、これまでの前提に異議を申し立て、精神分析の未来を考える上で重要な一石を投じている。

●A5判 288頁並製 本体価 3,200円+税

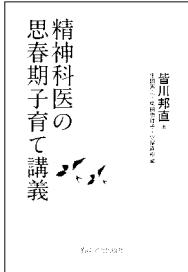
エキスパートによる講義で子どものこころと行動の理由がわかる

2018.12

ISBN978-4-7533-1149-1

精神科医の思春期子育て講義

皆川邦直 著／生田憲正、柴田恵理子、守屋直樹 編



●目次 第1講 現代社会と家庭——重くなっている親の養育責任 第2講 現代の中学生・高校生の悩み 第3講 思春期の発達と親子関係——親に望まれること 第4講 親が思春期の子どもに伝えるべきこと／他 ●内容 わが国の思春期精神医学の草分け的存在である著者が、思春期の子をもつ母親に向けに行った貴重な連続講義を、当時の息遣いそのままに収録。「どうしてこの子はこうなんだろう」という疑問を氷解させる、エキスパートならではの卓越した分析が満載。思春期のこころの発達、問題行動を起こす理由などに加え、夫婦関係を良くするコツについてもレクチャー。思春期子育てに悩む方必読の一冊。

●四六判 224頁並製 本体価 2,000円+税

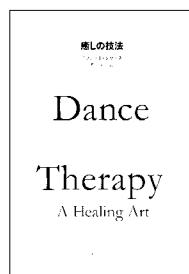
身体志向のセラピーの発展を事例とともに

2018.7

ISBN 978-4-7533-1137-8

ダンス・ムーブメントセラピー●癒しの技法

フラン・J・レヴィ 著／町田章一 監訳



目次● 第1章 マリアン・チェイス：「ダンスセラピーの母」 第2章 ブランチ・エヴァン：創造的なムーブメントがダンスセラピーになる 第3章 リリアン・エスペナック：精神運動療法 第4章 メアリー・ホワイトハウス：深層ムーブメント：ダンスセラピーにおけるユング派の技法 第5章 トゥルーデイ・シープ：ダンス、演劇、パントマイム、パフォーマンス 第6章 アルマ・ホーキンス：人間性心理学、イメージ、リラクセーション 第7章 ダンスセラピーが中西部に現れる 第8章 文献上に見られるパイオニア的な功績 第9章 ラバンとラムの理論的貢献／他

●B5判 400頁並製 本体価 6,000円+税

● Summary & Synopsis

概要● 心と体との結びつきや、体を使って心を癒すことへの関心が高まっている今、体を使った非言語による表現を扱う分野として、ダンス・ムーブメントセラピーが脚光を浴びている。その応用範囲は広く、方法論や理論的基礎が精神保健のあらゆる分野に広がっている。本書はダンスセラピーの理論的・実践的発展の後をたどり、まとめたものである。事例報告も全編を通じて見られ、ダンス・ムーブメントが持っている癒しの力について読者が深く理解する上での一助になるであろう。

「序文」より抜粋●ここ数年来、心と体との結びつきや、体を使って心を癒したりその反対のことについて再び関心が高まって来た。体を動かすことが心や体に非常に良い効果をもたらすことはずっと以前から知られていた。同時に、個々人が自己表現をしたりコミュニケーションをする方法が必要であることはますます認められつつある。その証拠に、クリエイティブ・アーツ・セラピーだけでなく、体を動かしたり身体志向の新しい形のセラピーも急速に増え、脚光を浴びている。

本書は、多くの人びとが体を使った非言語による表現を必要としていること、そして、これらの必要性がダンス・ムーブメントセラピーの発達と共にどのように満たされて来たかについて取り扱っている。

この学問分野はダンスセラピーとかダンス・ムーブメントセラピーと呼ばれることが多いが、その下位区分としての名前であるムー

ブメント精神療法、精神分析的ムーブメントセラピー、ユング派のダンス・ムーブメントセラピー、精神運動療法等とも呼ばれて来た。米国ダンスセラピー協会（ADTA）はこの学問分野を「ダンス・ムーブメントセラピー」と呼ぶ方針を掲げている。この学問分野において「ダンス」という名称と「ムーブメント」という名称が交互に使われるのは、「ダンス」という用語が意味する元々の概念に大きく由来している。「ダンス」という用語が使われると、それだけでは不十分な感じがしたり、当惑したりする人びとが多い。また、単に自分たちの思いや気持ちを表現するだけでなく、ダンスのステップを踏んだり、身体運動能力を見せなくてはならないのではないかと不安になる人びともいる。セッション中に見られる精神運動的表現は、形式的な意味でもまた非形式的な意味でもダンスとは似ていない場合がよくある。たとえば、手を伸ばす、握りこぶしを作つて怒りを表す、子どもが象徴的に体を揺する、また、頭を少し傾げるということでさえもダンスセラピーの表現過程や探究過程の要素になり得る。「怒りのマンボ」「インスピレーションのチャチャ」「ダンスで憂さを吹き飛ばす」等とからかう人がまだいるかも知れないが、こういった固定観念は急速に消えつつある。今日、ダンスセラピーはその応用範囲が広く、その方法論や理論的基礎が数多く、精神保健のあらゆる分野に広がっている。

(フラン・J・レヴィ)

分析家が懸命に生きた足跡としての理論を学ぶ

2018.7

ISBN 978-4-7533-1138-5

連続講義 精神分析家の生涯と理論

大阪精神分析セミナー運営委員会編



目次●はじめに 第1講 フロイト——その生涯と精神分析 第2講 アンナ・フロイト——その生涯と児童分析 第3講 エリクソン——その生涯とライフサイクル論 第4講 クライン——その生涯と創造性 第5講 ウィニコット——児童精神科医であるとともに精神分析家であること 第6講 ビオン——夢想すること・思索すること 第7講 サリヴァン——その生涯と対人関係論 第8講 コフート——その生涯と自己心理学、その先に彼が見たもの 第9講 間主観性理論・関係精神分析と米国的精神分析 特別対談「精神分析を生きること」狩野力八郎×松木邦裕 おわりに

● A5判 384頁 並製 本体価 3,800円+税

● Summary & Synopsis

概要● フロイトに始まる精神分析理論は、分析家自身が人間として苦悩し懸命に生きた足跡であり、その後の幾多の検証の結果として普遍性と科学性を備えてきた。精神分析の発展に貢献した著名な分析家たちの生涯と思想を、日本の各学派の代表的な研究者・臨床家が自身の言葉で語ることによって、その密接な結びつきが深い意味合いをもって読者のもとに届けられるであろう。

「おわりに」より抜粋● 大阪精神分析セミナーは、それまで精神分析の理論と実践を身近に学ぶ機会のなかった大阪の地に、体系だった精神分析を学ぶ場を立ち上げようと、川野由子ら数名の初学者が行動を起こしたことを契機に成立したセミナーです。代表に大矢大を迎えて、小此木啓吾先生の指導のもとに日本を代表する精神分析家を講師陣としてお迎えすることで、大阪に本格的な精神分析のセミナーが起動いたしました。

第一期大阪精神分析セミナーの初回は、一九九八年九月に小此木啓吾先生をお迎えして、「精神分析の動向——乳幼児精神医学と精神分析」のタイトルのもとに開催されました。そのときの模様は「はじめに」で大矢が述べているとおりです。小此木先生の本セミナーにかける熱い思いは、スタッフはもとより大阪の聴衆にありありと伝わったことだろうと思います。以後、二〇一七年度の第二十期大阪精神分析セミナーに至るまで、日本の精神分析を牽引する先生方のご協力のもとに、年十回のセミナーを

継続して開催することができました。

大阪精神分析セミナーの二十年の歴史は、大阪に精神分析が根付き、芽生え、育ち、そして大きく実を結んだ二十年間の歴史と重なるものであると自負しています。そしてこの二十周年を記念して、大阪精神分析セミナーで講師の先生方が残してくださった貴重なご講義を、広く皆様のもとに届けたいという思いのもとに、今回、本書が企画されました。ご講義は二〇一三年度の第十六期から「精神分析家の生涯と理論」のテーマを選びました。精神分析を生み出しそして発展させた精神分析家たちの生涯と思想を、日本のそれぞれの学派の代表的な研究者であり臨床家である先生方が御自身の言葉でそれに向けての思いを語ることによって、精神分析家それぞれの生涯と理論の結びつきと、そしてそれを学ぶことのもつ深い意味合いとが重なりあって読者のもとに届けられるのではないかと期待しています。

(横井公一)

今後の心理臨床の方向性に適合した新しい研究／臨床ツール

2018.8

ISBN 978-4-7533-1139-2

成人アタッチメントのアセスメント●動的-成熟モデルによる談話分析

P. M. クリテンデン, A. ランディーニ 著／三上謙一 監訳／馬場禮子 日本語版序文



目次● 第1章 序論——「私の言いたいことわかる？」 第2章 理論的背景 第3章 情報処理 第4章 アダルト・アタッチメント・インタビューの談話分析に用いられる構成概念 第5章 Bタイプ（バランスの取れた）方略の概観 第6章 Aタイプ方略の概観とA1-2 第7章 強迫的Aタイプ方略（A3-8）——危機への対処 第8章 Cタイプ方略の概観とC1-2 第9章 執着的Cタイプ方略——不確かさ、曖昧さ、脅威への対処 第10章 結合パターン——A/CとAC 第11章 対人関係的自己防衛方略の崩壊を反映する状態——未解決のトラウマ（Utr）または喪失（Ul） 第12章 対人関係的自己防衛方略の破綻を反映する状態／他
● B5判 360頁並製 本体価5,500円+税

● Summary & Synopsis

概要● 本書は新たな理解に基づくAAI（Adult Attachment Interview）の翻訳である。これまでにもインラによるAAIが、乳幼児期のアタッチメントの質が特に子育てにどう作用するかという、人格形成上の重要な課題を巡る研究に大きな役割を果して来た。クリテンデンの動的成熟モデルに基づいたAAI（=DMM-AAI）は、発達過程において生得的資質と環境要因とがダイナミックに相互作用してパーソナリティの成熟を促していくとするものであり、必ずしも幼児期の母子関係のみを論拠とせず、より動的な発達観に基づいているところが魅力的である。

DMM-AAIは、人間の在りようを最も奥深くまで理解する精神分析の諸理論を根底に置きながら、広く身体的要因にも社会的及び人的な環境要因にも目を向けるという、これから心理臨床の方向性によく適合し、臨床心理士が身につける技法として、きわめて高い将来性を持つものである。

「日本語版序文」より抜粋● 1980年代以降の研究については、すでに一例として脳科学研究の知見との照合を挙げたように、進歩しつつある他分野の研究を取り入れることでAAIの観点を拡げている。さらに、成人のアタッチメントの複雑さに対応する、年齢層を拡げた研究も追加されている。被検者の社会的、文化的な層も拡張され、より多層的な基礎研究がなされている。年齢により世代によって、アタッチメントの方式は多様に変化するのであり、必ず

しも幼児期との一貫性は仮定できないとする、DMM制作者の見解は、きわめて納得できるものである。

これら諸点の修正を含みながらDMMは、strange situation法による乳児の分類システムを、そのまま成人に当てはめようとしたところから生じる矛盾点を解消し、新しいカテゴリー分類に到達している。AAIが半構造化面接による方法であることから、その技法を習得するには多くの時間と労力を要するであろうが、それを通して心理臨床家としての面接技法そのものの修練にもなるという利点も生かせるであろう。

今後の心理臨床の目指すべき方向性として私は、人間の在りようを最も奥深くまで理解する精神分析の諸理論を根底に置きながら、広く身体的要因にも社会的及び人的な環境要因にも目を向けるような、人間への理解と関わりができる臨床が望ましいと考えている。DMM-AAIはこうした条件に実によく適合しているので、臨床心理士が身につける技法として、きわめて高い将来性を持つと考えている。私自身はもはや、この技法を身につけて臨床を実践できる年齢ではなくっているが、訳者であり本法の紹介者である三上謙一氏は、まさにこれから心理臨床の牽引役として、活躍して下さるものと期待している。

（馬場禮子）

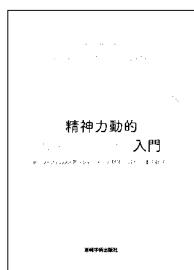
セラピーを技術面を中心に解説、初心者に好適

2018.9

ISBN 978-4-7533-1140-8

精神力動的サイコセラピー入門●日常臨床に活かすテクニック

セーラ・フェルス・アッシャー 著／岡野憲一郎 監訳／重宗祥子 訳



目次● 監訳者まえがき 本書について はじめに 謝辞 第1章 精神力動的サイコセラピーの言葉を理解すること 第2章 始まり 第3章 生育史を聴き取ることとフォーミュレーション 第4章 セラピーにふさわしい患者を選ぶこと 第5章 繼続治療 第6章 防衛的な患者を扱い続けること 第7章 終わり 第8章 スーパーヴィジョンを活用すること 参考文献 訳者あとがき 索引
● A5判 200頁並製 本体価3,000円+税

● Summary & Synopsis

概要● 本書は精神力動的サイコセラピーを、その技術的側面を軸として解説した入門書である。全8章を通じまったく初心者の学生を、サイコセラピープロセスの最後にまで導いていく。

まず、精神分析的／精神力動的理論の概観が説明される。その後は「始まり」「継続治療」「終わり」といったセラピーのプロセス順の章構成で、それぞれのシーンで必要とされる技術が詳説されていく。明解にセラピーの全体像を把握し、技術を学ぶことができる一冊といえる。

本書は、学生の視点から書かれていて、彼らが実践において出会うと思われる困難に焦点をあて、技法に関して具体的な示唆を与えていることにも特徴がある。精神分析家、サイコセラピスト、精神科レジデントはもちろん、サイコセラピーを専攻する大学院生と社会福祉の学生に最適であろう。

「監訳者まえがき」より抜粋● 本書「精神力動的サイコセラピー入門」は、精神分析的精神的セラピーを志す者にとって極めて明快かつ平易な言葉で書かれたテキストである。(ちなみに本訳書では心理療法、精神療法を「セラピー」と、療法家を「セラピスト」と呼んでいる)。

本文からは著者セーラ・フェルス・アッシャー女史の息遣いが伝わってくるようだ。精神分析を非常に積極的に日常臨床に取り入れようというその姿勢。そしてそれを確固たる精神分析的なトレーニングとそれに基づく治療理念が支

えている。著者の頭には治療の設定、治療構造とはこうあるべきものである、というモデルが明確に備わり、その構造を厳守し、受け身性を保ち、転移解釈を中心とした技法を守るという姿勢が見られる。しかしそのうえで柔軟性に富み、患者に寄り添い、細やかな配慮を忘れない。このようなセラピストを持った患者やバイターはさぞかし安定した治療の場を提供された安心感や心地よさを覚えるだろう。

(中略)

本書が備えるいくつかの特徴は、自分なりの精神分析的なスタイルを模索するセラピストたちにとって大いに助けになるに違いない。特に第3章のフォーミュレーションの書き方、第6章の防衛的な患者の扱い、第8章のスーパーヴィジョンの活用などに、著者らしさが表れている。これらの記述は長年の女史のスーパーヴィジョン経験に裏打ちされる具体的でかつ懇切丁寧なものであり、ビギナーのみならず指導者レベルのセラピストにとても参考になるであろう。

(岡野憲一郎)

精神分析の「倫理的転回」とは何か

2018.10

ISBN 978-4-7533-1141-5

精神分析が生まれるところ●間主観性理論が導く出会いの原点

富樫公一 著



目次● はじめに 序章 精神分析の世界の誕生 第一部 間主観性理論から倫理的転回へ 第1章 間主観性理論と倫理——入門編 第2章 臨床的営みの加害性 第3章 精神分析的システム理論と人間であることの心理学 第4章 精神分析の倫理的転回とその意味 第二部 倫理的転回からの精神分析概念の再考 第5章 人間であることの心理学 第6章 自己対象概念再考——対象から他者へ 第7章 共感と解釈 第8章 逆転移と共転移 第三部 倫理的転回と臨床実践 第9章 二つの間主観性理論、そしてサードとゼロ 第10章 関係の行き詰まりと倫理 第11章 治療的相互交流と相互交流以前の人間的出会い／他

● A5 判 248 頁並製 本体価 3,200 円+税

● Summary & Synopsis

概要● 臨床家はどのように苦悩する患者に出会うのか？ その出会いとは何だろうか？ 目の前に表れた了解できないその人は、自分に応じるようにとあなたに呼び掛ける。あなたはよりもまずそれに応じる。精神分析の作業が生まれるのはその瞬間である。そこに、患者が生まれ、治療者という役割が生まれる。本書は、人が人と出会うところにすべてが生まれるという視座から、臨床上のさまざまな問題を検証するものであり、そのテーマは精神分析に限らず、精神医学やその他の心理療法に携わる臨床家、そして、医療や福祉、教育、司法領域で人に向き合うさまざまな専門家と共有されるであろう。「はじめに」より抜粋● 臨床家はどのように苦悩する患者に出会うのか？ 苦悩する患者とのやり取りで、臨床家自身も傷つきを背負うかもしれない中で、臨床家はどのようにして患者に向き合うのか？ 人は人であろうとする限り傷つきやすく、脆弱である。それでも臨床家は人として患者に出会い、人としての悲しみに付き合う。その出会いとは何だろうか。精神分析や精神分析的心理療法に携わる臨床家は、意外にも、そうしたことをそれほど深く考えてこなかった。本書は、精神分析や精神分析的心理療法に携わる専門家とともに、その臨床実践を倫理という側面から考えようとするものである。これはもちろん、精神分析に限らず、精神医学やその他の心理療法に携わる臨床家、そして、医療や福祉、教育、司法領域で人に向き合うさまざまな専門家と共有されるテーマである。

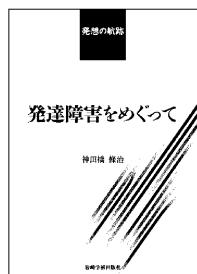
倫理といつても、本書で述べるそれは、臨床実践上の原則（倫理綱領）や、道徳心の発達理論といったものではない。それは、人が人と出会うところにすべてが生まれるという視座から、臨床上のさまざまな問題を検証しようとするものである。言い換えれば本書は、そういった視座から精神分析の理論体系や臨床実践を見直し、私たちの仕事がどのようなものなのかを記述しようとするものである。

本書は三部構成で、各部はそれぞれ独立した三章から四章の論文からなっている。第一部は「間主観性理論から倫理的転回へ」、第二部は「倫理的転回からの精神分析概念の再考」、第三部は「倫理的転回と臨床実践」と題した。第一部の「間主観性理論から倫理的転回へ」では、倫理的転回の歴史的背景と、今まさに動いている倫理的転回の方向性とそこに含まれる問題を概観する。そのうえで、私が長年問い合わせてきた Kohut 理論に含まれる人間性のテーマを考察する。第二部の「倫理的転回からの精神分析概念の再考」では、自己体験・自己対象・共感・解釈・転移・逆転移といった精神分析の基本概念を倫理的転回の視座から問いかける。そこで注目されるのは、他者としての患者に出会うことの意味と、臨床作業の不可知性の倫理的意味である。第三部の「倫理的転回と臨床実践」では、他者としての患者に向き合い、情緒的な関係を持つこと自体が、治療者にどのような責任と関与を求めるのかを論じる。

(富樫公一)

発達障害をめぐって●発想の航跡 別巻

神田橋條治 著



目次● まえがき イントロダクション 現時点でのボクの「発達障害」診療 第一部 発達障害の全体像 発達障害とのかかわり、パーソナリティ障害から発達障害へ、発達障害からパーソナリティ障害へ——発想の導火線 第二部 発達障害の診断と治療 難治症例に潜む発達障害、ケーススーパービジョン 第三部 発達障害を読む 書評『子どものこころの不思議——児童精神科の診察室から』、書評『LD・ADHD・高機能自閉症へのライフスキルトレーニング』、書評『もっと笑顔が見たいから——発達デコボコな子どものための感覚運動アプローチ』、書評『ぼくらの中の発達障害』／他

● A5 判 208 頁並製 本体価 2,500 円+税

● Summary & Synopsis

概要● 発達障害の根本的治療法はまだないが、脳が常に発達し続いていることが頼りであり、その脳自身の発育努力を援助し妨げないというものが著者の診療の方針である。

本書は著者の近年の著作から「発達障害」に関するものを、当事者や家族の方々にも手に取りやすい形にまとめたものである。著者の現時点での診療の実際と考え方について、「現時点でのボクの『発達障害』診療」と題しての書き下ろしを添えた。

「まえがき」より抜粋● 老齢になったボクは週二日の診療で、一日四十～五十人の外来を診ています。その中の三分の一は発達障害を基盤にした患者さんです。多くは本人自身ならびに家族の無理解さらには人生での傷つき体験から、「生来の脳の発達凸凹を無視しての活動負荷、によって二次障害を受けている」人々です。さらに加えて、「専門家による不適切な向精神薬治療、によって三次障害を蒙っている」人もあります。発達障害の根本的治療法はまだありませんが、「脳は常に発達し続けている」が頼りです。その脳自身の発育努力を援助し妨げないことが、わたしたちの正しい方針だと思っています。その考えで毎日の診療をしています。

『発想の航跡』の読者はおもに専門家ですし、本の厚さも値段も一般向けではありません。そこで「発達障害」に関する部分を別冊とし、当事者や家族の方々向けの本に纏めてみました。纏めるにあたって、ボクの現時点での診療の実際と考え方について、「現時点でのボクの『発達

障害』診療」と題しての書き下ろしを、この別冊の第一章として添えることにしました。

発達障害の増加に伴い、関連の出版物が洪水のように溢れています。ほとんどは「外の視点」から書かれたものです。ごく少数ですが、当事者の「内の視点」から書かれた体験記があります。それを是非お読み下さい。発達障害は各人各様ですから、体験も各様です。ただ一点だけ共通するのは、外からの「理解」と内からの「体験」の食い違いの酷さです。何の苦しみでも「病んでいる・つらい体験」は他人にはわからないのが当然ですが。発達障害では他のすべての「病い」と比較して群を抜いています。体験の豊かさや細やかさや複雑さ、とコミュニケーション機能の未発達の組み合わせが生み出した結果なのでしょう。体験記を読まれることで、外からの「理解・判定」は実はとんでもない「誤解」であり、専門家が良かれと思って行う援助や助言で当人も家族も却って苦しむ結果になり、「二次・三次障害」を増やしているのかもしれない、「立ち止り省みる」余裕が生まれますと、そこから新しい道が開けます。一言でいうと専門家が知識を盛り込んで書いている解説書（ほとんどの書籍）は当事者（本人と家族と援助者）にとって益が少なく害が大きいです。

(神田橋條治)